

Annual Report 2022

ネパール インドラサロワールのマハチュニ高校から見る段々畑

特定非営利活動法人 **地球の木**

2022年度 年次報告書

(2022/4/1 ~ 2023/3/31)



地球の木が目指す社会(ビジョン)

地球上すべての人々が、自然と共存し、一人ひとりの人格や固有の文化を尊重し、人が人らしくあたりまえに生きていくために、互いに助け合う社会をめざします。

地球の木の使命(ミッション)

地球の木は、主にアジアの国々で、社会的に弱い立場におかれた人たちが、自らの権利を知り、未来を自分たちの力で切り開いていけるように、教育や地域づくりのあり方を共に考え、対等な立場で必要な支援をおこないます。

同時に私たちは、国内においても、多様な人々や市民団体と連携し、真の豊かさを育む教育活動や多文化共生の社会づくりに携わります。

—— このミッションステートメントは、設立30周年の2021年に作成されました。

地球の木の活動(事業)



2022年度事業の概要

海外自立支援活動では、ラオス図書教育プログラムが始まりましたが、カンボジアの女性への暴力に対するシェルター支援プログラムは終了となりました。また、ネパールのインドラサロワールでの教育を重点に置いた地域づくりプログラムでは、コロナ禍により中断されていた現地へのモニタリング調査を行うことができました。

社会教育活動では、地球の木講座で多文化共生についての基本的な理解を深めたり、川崎市におけるフィールドワークの実施など、多文化共生の地域づくりにつながるよう活動を行いました。

各事業活動をはじめとして、賛同者、参加者を広げることを意識して年間を通してさまざまな活動を行ない、また、オンラインでの発信技術の向上を目指しました。

会員数(2023年3月末)

575名(正会員134名、サポート会員441名)

ボランティア参加者

多くのボランティアによって、地球の木の活動は運営されています。

チーム活動.....33名
クラフト販売.....10名
事務局サポート.....11名
ラオス図書貼付活動.....のべ154名

理事・監事・顧問(2022年度)

理 事		監 事	顧 問
磯野昌子(理事長)	田中浩平	飯田信子	清水俊弘
大嶋朝香(副理事長・事務局長)	中野真理子	加藤 稔	山西優二
石北正道	乳井京子		横川芳江
勝田文隆	沼田由美子		丸谷士都子
サブコタ・ドルラス	山田孝志		

他団体とのネットワーク

■理事・委員として参加

横浜NGOネットワーク、かながわ生き生き市民基金、キララ賞選考委員会、「南北 코리아 と日本のともだち展」絵画展実行委員会、あーすフェスタかながわ実行委員会、「東日本大震災・復興まつり2022」実行委員会、支援ネット神奈川、遺贈寄付等相談・市民ネット

■その他

国際協力NGOセンター(JANIC)、開発教育協会(DEAR)、APLA、メコン・ウォッチ、参加型システム研究所、NGO非戦ネット



ネパール

質の高い教育で 行動する若者を育てる

現地パートナーNGO: SAGUN

土地の文化や伝統を尊重しつつ、人々の持つ潜在能力を引き出すような住民主体の開発をめざす専門家からなるNGO



毎日2,000人が海外に流出するネパール。支援地インドラサロワール(以下IRM)も例外ではありません。教育レベルが低く、高校を卒業できても職がない。経済的に余裕のある家は、子どもを都市の学校に行かせるか、家族ごと都会に引っ越してしまう。過疎化のために学校は統廃合。未来に希望が持てない若者は、学ぶことに意味を見出せず、うつや自殺者も出ています。

2022年、地球の木とSAGUNは、ロシ地域での15年にわたる「幸せ分かち合いムーブメント」の成功事例に倣い、IRMでは教育に特化したプログラムをはじめの一步から地方政府と協働して始めました。

(一部写真はSAGUN提供)

崖の上のナイチンゲール

棚田に囲まれた山の斜面にあるマハチュニ高校。バレーボールのコートが一面あるが、ボールがコートを囲むフェンスを越したら取りに行けないくらいの急勾配だ。少数民族出身のヨギタさん(10年生)は、記事作成トレーニングに参加して、記事が地域情報誌に掲載された。「読書が好きで、ナイチンゲールの伝記を読み、看護師を目指すようになったと記事に書きました。裕福な家庭に生まれたナイチンゲールとは違って、自分は貧しい家庭に生まれましたが、人のためになる仕事がしたいです。医療が立ち遅れた地域の人たちの役に立ちたいです」と抱負を語る。その目は未来を見つめていた。



ヨギタさん

活動概要

IRMの若者たちの育成を阻む要因は、先行きの不透明さだけではなくありません。新型コロナウイルスの影響、学校の授業がおもしろくない、教師はビジネスマンのようで教育に無関心である、保護者や教師との対話不足などです。一方、生徒たちが抱える様々な問題に対する教師や保護者の認識は極めて低く、意識改革の必要がありました。SAGUNIは、教育の質の向上による地域の生活改善をめざして、IRMに21校ある学校の校長、教師、生徒、保護者と話し合い、交流を繰り返し、よい人間関係の構築に努めました。2022年度は、政府もまだ手を付けることのなかった、2つの分野に踏み込みました。一つは、心理カウンセラー養成のためのトレーニング。もう一つは社会の不正や不条理を批判的にみる教育法「クリティカル・ペダゴジー」の提案です。

国内活動

- ・JICA教師研修で「幸せ分かち合いムーブメント」について発表(8月)
- ・「マンガルタール村だより」最終号に、15年間のまとめを掲載し、会員、寄付者に送付(9月)。
- ・「マンガルタール村幸せ分かち合いムーブメント終了報告書」を作成。助成団体や大口の寄付者に送付(11月～12月)。
- ・オンラインイベント「SDGsよこはまCITY秋」で「住民主体の開発とは? ～ネパールの事例から～」を発表(11月)。
- ・横浜YMCAグローバルセミナー「ネパールの出稼ぎ事情と村の参加型地域づくりの試み」で幸せ分かち合いムーブメントを紹介(12月)。
- ・4年ぶりのモニタリング調査(2月)でIRMの主なリーダーたちと話し合い、顔の見える人間関係をつくることができました。調査以外でもチームメンバーの3名がIRMを訪れたことで、プログラムへの理解が深まりました。

活動地で生まれた変化

教育について、行政の人たち、教師、生徒、保護者などと話し合いを重ねることで、教育への関心が地域全体で広がっているのがわかりました。「社会心理カウンセリング・トレーニング」に参加した先生方は、トレーニングの成果を熱く語ってくれました。「これまでは子どもが解っているか配慮することがなかったが、今は確認しながら教えている」「子どもたちが抱えている不安や恐れを知った」「教える自信がついた」また、SAGUNIは「クリティカル・ペダゴジー」に関連する画期的な内容の2冊の本を21校の校長先生に配布しました。

記事作成トレーニングに参加して、作品が地域情報誌に掲載された、2人の高校生は「これからも文章を書いていきたい」「もっと勉強したくなった」とトレーニングから大きな刺激を受けたようでした。



専門家を招いてワークショップ



英語で教えるチャンドラ小学校では若い先生を雇用



学校を中退して今は調理師として働く若者の話を聞く



IRM教育コーディネーター(右)から本を受け取る校長先生



ラオス

森を守り、暮らしを守る

現地パートナーNGO: JVC

(NPO法人 日本国際ボランティアセンター)

1980年の設立以来、アジア、アフリカ、中東で、
上下や貧富を作る社会構造そのものを変える
ため、現地の人と共に活動している。



地球の木は、JVCがラオスの農村で行っている「自然資源を保全し、住民主権を尊重した活動」を支援しています。その根本にある「奪うのではなく分かち合う」という理念に共鳴するからです。私たちは、JVCラオスの現地活動を知り、それを会員に伝えると共に、ラオスの農村の暮らしから見えてくる課題を広く発信します。そして一緒に考える場を提供し、日本の自分たちのライフスタイルや消費行動を見つめ直すことにつなげる活動をしていきます。

(写真はJVC提供)



村人との話し合いで

「以前他のプロジェクトと共に設置した保護林をパトロールしているが、その日当を出してもらえないだろうか」と村人。JVCは、あまりお金や資材を直接出す活動はしていません。私はこう答えました。「コミュニティー林のパトロールは、村の人たちが本当に重要な事だと思うからやっているわけで、必要じゃなければやらないでしょ？お金や資材は関係ないんじゃないですか？」そうすると、まあ、彼らはがっかりしますが、そんなものかという反応でもあります。話せば分かるんですね。我々の意図を伝えて、そのあと収集したデータを分析し、話し合いを重ね、必要であると合意したところを適宜保全していく、そんな風に活動を進めています。

(JVC駐在員 山室良平さん談)



JVCラオスの現地活動概要

人口の6割以上が、農村部で自然に依拠した自給的な暮らしを営むラオス。活動地のセコン県は自然が豊かに残る一方、近年は水力発電や企業による大規模プランテーションなどの開発事業が進んでいます。また農民によるキャッサバやコーヒーなどの換金作物栽培も広がり、共有の森や土地を失うなどの問題をかかえています。JVCは、セコン県の10村を対象に、住民が暮らしの基盤である土地や森、川などの共有資源を奪われないよう管理し、持続的に利用していくための活動を村人と共に取り組んでいます。

■自分たちの村を知り、共有資源の価値を確認し合う

3村で村人と共に基礎情報(人口・歴史・生産物・村境など)を収集し、冊子や資料にまとめる作業を進めた。また直面している開発問題についても情報を共有し、共有資源が食料や収入の源として価値を持っていること、またそれが減少しつつあることを確認した。

■コミュニティー林と魚保護地区

3村で、共有資源を持続的に管理、利用する仕組みとして、コミュニティー林と魚保護地区を導入することで合意し、規則の策定サポート、区域測位などの作業を進めた。2村で規則や地図などを示す看板を設置し、近隣の村人や行政官を招いて式典を実施した。

■自然資源に対する住民の権利について学ぶ法律研修

村が直面している開発問題に対して、どう対応していけばいいのか、その実践的な方法を学ぶ村人向けの法律研修について準備を進めた。研修に活用する「2023年度版法律カレンダー」の内容を他のNGOや行政機関と共に策定し、発表会を開催した。

■提言活動

県郡行政との会議を2回実施。魚保護地区に関しての、行政側のうまくいかなかった過去の事例に対して、JVCが進めている良い実践例を伝え共有した。また、県境の活動村がコミュニティー林候補地にしている森を、企業が開発しようとしている事例では、関係行政にそこで起こる問題を解決すべきだという提言を行った。

JVC駐在員から➡ 前の活動地サワンナケート県に比べると、セコン県は田舎であるせいか、行政高官とも話す機会が多く、また話し易い。

地球の木の活動(国内)

- ・サワンナケート県でのJVCの活動や成果についてまとめ、寄付者、支援者に送付(7月)
- ・JICA教師研修で「ラオス・森はスーパーマーケット」について発表(8月)
- ・国内での関心を高めるため広く声掛けし「奪わない暮らし・奪われない暮らし」をテーマにJVCと協力しラオスプロジェクト報告会を実施(10月)
- ・「開発と森林」をテーマに勉強会を2回実施(1月)



村人たちと村境を見分する



みんなで基礎情報を収集する



魚保護区に設置した看板



法律カレンダーに見入る



両岸が精霊林



ラオス

本と出会い、 自分の世界を広げよう！

現地パートナーNGO:

NPO法人 **ラオスのこども (ALC)**

公正で平和な社会づくりに貢献することを目的とし、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、読書に親しむ環境をつくる活動しています。



ラオスでは図書館や本屋が身近にありません。ラオス語の本自体もとても少なく、本に触れる機会が限定されています。学校教育は公用語のラオス語で行われるため、学年末に進級試験が行われるラオスでは、学習言語であるラオス語の習得が学校での勉強の継続に直結しています。また、ラオスは約50の民族が暮らす多民族国家で、とりわけ、このような少数民族の子どもたちは母語でないラオス語で授業を受けなくてはならず、高い退学率に繋がっています。

このプログラムではラオスの図書館環境の向上を通して、ラオスの子どもたちがラオス語を習得し、「本に親しみ、読書を通じて自ら学習する力をつけ、未来を選択していくことができるようになること」を目指します。

(現地の写真は「ラオスのこども」提供)

活動概要

■ 現地活動

NPO法人 ラオスのこども (以下ALC) が行う以下の2つの活動を支援しました。

① ヱィエンチャン都内の中等学校2校で図書応用研修を実施

図書館が、「本を楽しむだけでなく、さらなる学びの拠点となること」と「持続して活用・運営されること」を目的に、2校の教員、図書館ボランティアの生徒を対象に図書館応用研修を実施しました。参加者が専門家のアドバイスを受けながら案



応用研修、図書館オープンデーでの展示発表

を作成し、展示や発表を実際に行うなど、実践的な研修が行われました。

②『コイチャパイサイノ(邦題:ぼくはどこへいくの?)』の再版

環境絵本『コイチャパイサイノ』が、ラオスでほとんど出版がない「学習につかえる本」だという理由で、再版の一部(800冊)を支援しました。今後ALCにより、再版した絵本が学校図書館へ配布されるとともに、活用ワークショップも実施されます。

■国内活動

日本国内では、現地活動を伝える講演会、日本の絵本にラオス語を貼付して現地図書館に送る支援活動を行いました。

① 図書館応用研修の講演会

ALCの現地駐在員の渡邊淳子さんを講師に迎え、「ラオス・成長する図書館とは? ~地域ぐるみで図書館を学びの場に」と題した講演会をラオスからの配信で実施しました(11月)。

② 日本の絵本にラオス語翻訳を貼付する活動

ALCから提供された、取り組みが可能な絵本リストから5冊の絵本を選定し、寄付を呼び掛けたところ、130冊もの絵本の寄贈を受けました。貼付ボランティア活動は33回実施し、のべ154名の方の参加を得ました。また、ラオスに送る絵本に親んでもらい、活用してもらうため、『わたしのワンピース』を題材にペープサートの動画を貼付ボランティアの方々で作成しました。この動画と作成したペープサートは今後、ラオスの図書館に送るよう予定しています。

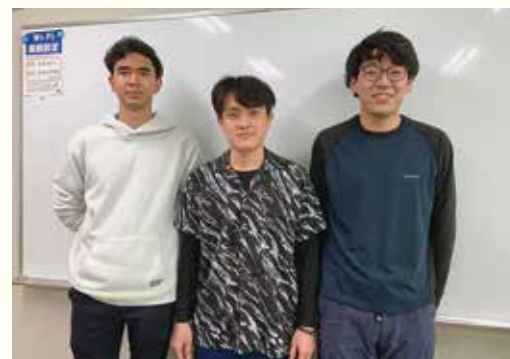
新型コロナウイルスの影響でラオスへの船便が止まっているため、貼付した絵本は、運搬ボランティアの方の手で、ALCが運営するラオスの学校図書館などに届けられています。この活動に関わっていただいた多くの方のご協力に、心より感謝申し上げます。



『コイチャパイサイノ』でワークショップ



二人一組で貼付ボランティア



動画でラオス語朗読をしたラオス人留学生2名と紹介していただいた高階(右)さん

環境絵本『コイチャパイサイノ(邦題:ぼくはどこへいくの?)』

のどかな晴れた日。ラオスの村でバナナちゃんとビニール袋くんが出会います。バナナはラオスの人びとのくらしのあちこちに登場します。実を食べるのはもちろん、花を料理に使ったり、葉をお皿にしたり、茎を豚の飼料にしたり。実にさまざまです。そして、やがて自然に還っていきます。一方、プラスチックは自然には還りません。風に飛ばされてあちこちへ。ぼくはどこへいくの?

『ぼくはどこへいくの』はラオスの子どもたちに環境の大切さを伝えるために、絵本作家のやべみつのりさんの協力を得て、2004年にALCが出版した絵本です。こだわったのは、豊かな自然のもとで育まれたラオスの人びとのくらしを描くこと、そして、増えてきたビニール袋を見つめ直してほしいということでした。この絵本はラオス各地の学校図書館に届けられ、環境教育の親しみやすいツールとしても活用されています。



祭壇の飾り付けにもバナナの葉が使われます

(情報提供 NPO法人 ラオスのこども)



CWCCのスタッフたち

カンボジア

折れない心で立ち直る 女性たちを応援

現地パートナーNGO: CWCC

(カンボジア女性緊急救援センター)

「女性の自立支援」を目的に、さまざまな暴力により被害を受けた女性や子どもたちのために、1997年に現地カンボジアの女性たちによって設立されました。

経済発展著しいカンボジア。その発展に取り残され、貧困など、厳しい状況に置かれている人々が多くいます。中でも家庭内暴力、性暴力、人身売買などの被害に遭う女性が後を絶ちません。地球の木の現地パートナーNGO・CWCCは、その原因が女性差別にあると考え、女性や子どもたちの権利を擁護し、性暴力を容認しない社会への変革を提言していく活動を行っています。このCWCCの活動は、「女性たちが自立していく過程を応援する」という事を活動の柱としている地球の木にとって深く共感できるものであり、2014年から支援を行ってきました。

(一部写真はCWCC提供)



CWCC現地活動概要

シェルターに保護されたサバイバー（被害者）たちの最終の目標は社会復帰することであり、滞在するのは10ヵ月程度です。この期間中に、心身の回復を図ったうえで、自立のための職業訓練を行わなければなりません。特に大事なのは彼女たちが自分たちの権利を知り、自信を取り戻すことです。

*心のケア…最大の配慮をしながら、専門家による心理カウンセリングやセラピーが行われます。サバイバーが精神的なストレスや羞恥心から解放され、再び立ち直る力をつけることを目的としています。



個人カウンセリングは、サバイバーがカウンセラーと一対一で向き合い、信頼関係を築いたうえで心を解き放つことを目的としています。

グループカウンセリングは、辛い経験をした者同士が話し合い、お互いを知り、友情を育て、家族のように感じられるようにします。

＊**職業訓練**…シェルターを出たあと仕事をして自立できるよう、訓練を受けます。縫製の技術、パンなどの食品加工や手工芸品作りを学びます。和やかな雰囲気の中で行われ、サバイバーたちの笑顔が見られる時間です。

＊**法的サポート**…CWCCでは、DVやレイプ被害者が自ら法的措置を行うのを前提としています。

女性に対する人権意識がまだ低く、性被害を受けても女性が男性を訴えることは難しく、示談で解決したり泣き寝入りしたりすることが多い中、勇気をもって自ら訴訟を起こすと決めたサバイバーのために、自分では揃えにくい必要書類などをCWCCが用意します。女性の意識を変えていくと同時に男性の意識改革も必要で、ジェンダーに関する提言活動にも力を注いでいます。

地球の木の支援は

地球の木の支援金は決して多くはありませんが、女性たちがシェルターで心身の傷を癒し社会復帰を果たすため、シェルター滞在中および新しい生活や仕事を始めるための以下の費用を支援してきました。

- ① シェルター内での日常の食費と医療費
- ② 自立に必要な職業訓練のための材料費(裁縫など)
- ③ 新たに起業するための支度金
- ④ 自活するための当座の日用品や食料費

社会復帰する女性たち

サバイバーたちの抱える問題が深刻な上、個人情報などの制限も多く、支援開始当初は、現地の活動を伝える難しさもありましたが、定期的に訪問を重ね、CWCCからの信頼を得られるようになりました。その結果、シェルター内のサバイバーたちだけでなく、社会復帰を果たした元サバイバーたちによって直接話を聞くこともできました。シェルターを出て、地球の木の支援金で新しい生活を始めることができた女性たち、家に戻ることができた女性たち、また米の販売、バッグや洋服づくりをして社会復帰する女性たちが育っています。シェルターを出た後もCWCCのスタッフによるフォローアップが続くため、シェルターに戻ってくる人はほとんどいないとのこと。

2014年から9年間にわたって行われたCWCCへの支援は2022年度をもって終了しました。ただ女性たちの状況が決して良くなっているわけではなく、CWCCの懸命な活動はこれからも続きます。



小学生が幼稚園児に勉強を教えます



ビーズ細工をする子どもたち



ナプキンをたたむ練習



元サバイバーの家庭を訪問

多文化共生の地域づくり

県内でも増えている外国籍の人たち。彼らが日本で暮らすうえで問題となっている制度の壁やこころの壁などを、同じ地域に住む人々が理解し、彼らの人権が守られ、豊かな文化交流が出来る地域社会づくりを目指しています。



ユーモアを交えてお話をする孫牧師(川崎戸手教会にて)



川崎朝鮮初級学校で校長先生から現状を聞く



崔さん(ふれあい館の館長)から体験を聞く

■「多文化共生フィールドワークinかわさき」

2021年度には、歴史的にも多くの外国につながる人々が暮らし、ヘイトスピーチ条例(川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例)も制定されている川崎市で、ワーカーズ・コレクティブ(W.Co)メロディーと共に対話カフェを連続3回行いました。

2022年度には、同じくW.Coメロディーと3回のフィールドワークを川崎市で行い、フィールドワークを行い、「多文化共生」の実例について貴重な学びを行うことができました。

- ・幸区戸手の多摩川河川敷(在日コリアンコミュニティ跡地)見学と戸手教会訪問(5/17)
- ・川崎朝鮮初級学校訪問(6/1)
- ・川崎区桜本「ふれあい館」訪問(6/20)

「このような事実を多くの人々が知って、共生していける社会を創っていきたい」、「直接的、間接的に自分自身も人権侵害の当事者になっていることを常に顧みることが必要だと強く感じました」などの参加者の感想に、開催した手ごたえを感じました。また今後に向けて大事な人的つながりを得ることができました。

■ネパール人コミュニティとの話合い

NPO法人かながわネパール人コミュニティと共に、神奈川県に暮らすネパールの人々の課題を確認しながら、何ができるのか検討を始めました。

■メールマガジン「Colorful World」

多文化共生メールマガジン「Colorful World」の発行を始めました。「多文化共生」に関心を持つ方々の声や、活動を紹介していきます。(試作号、1～4号を配信)

出前講座

学校や地域へ出向き、私たちの支援地で実際に起こっていることや現地から学んだことを元に、持続可能な社会実現のために自分たちに何が出来るかを共に考えるワークショップを開いています。

■学校や地域での出前講座

- ・鎌倉女学院高等学校(6/11) 「ネパール・タルー族の家族ゲーム」
「未来の食卓」
- ・町田市立真光寺中学校(7/16) 「ネパール・わくわくワークショップ」
- ・蒔田コミュニティハウス(12/18) 「身近なバナナを通してSDGsを考える」

■講師の増員とスキルアップ

開発教育協会(DEAR)のワークショップやd-labに参加し講師のスキルアップにつとめました。新メンバー2名が加わり、ファシリテーターが増えました。



ミニお芝居を熱演する参加者たち
(蒔田コミュニティハウス)

地球市民活動

■地球の木講座 — 多様な背景をもつ人びとと「共に生きる」社会をつくるために — (1/14)

講師: 鈴木江理子さん

(国士舘大学文学部教授・移民政策、人口政策、労働政策を研究する傍ら、外国人支援の現場でも活躍)

国際協力とともに「多文化共生」の重要性を打ち出している私たちは、「多文化共生」を考えるにあたり、日本に住む外国人の現状について知り、人権の視点から私たちに出来ることを考えてみようとして鈴木先生のお話を聞きました。

～鈴木先生のお話から～

そもそも社会というものは、マジョリティにとって都合よくできている。共に生きるには、マジョリティである私たちが変わっていかなければならない。その一つに多文化共生教育がある。幼少期から多様なものに触れると自然に「ちがい」に対する寛容性を身につけることができる。「外国人」ではなく、「〇〇さんを知る」「〇〇さんと友だちになる」など、一人ひとりを知り、共に生きるという姿勢が大切である。



■地域イベント

以下のイベントに参加しました。

- ・鎌倉国際交流フェスティバル(11/6)
- ・ひらつか市民活動センターまつり(11/27)
- ・東日本大震災・復興まつり2022(11/12)
- ・あーすフェスタかながわ2022(12/4)

■国際協力カレンダーの販売

2023年用国際協力カレンダー壁掛け用を485部、卓上用を72部販売。

地球の木カレンダーとして長年にわたり多くの人にご愛用いただいたカレンダーですが、制作元の日本国際ボランティアセンターがカレンダーの制作をやめることになったため、2022年度末の販売が最後となりました。



取引販売事業

地球の木では、生産者の自立を助けるため、また、クラフト品(手工芸)を通して、生産者や生産地の情報を伝えるため、クラフト販売を行っています。

■販売

福祉クラブ生協での共同購入(5月、10月)、生活クラブ生協での共同購入(3月)、デポー展示会(東寺尾5/24・11/17、東戸塚6/25・3/24、つなしま12/7)、イベントなどで販売を行いました。

■生産者情報の発信

生活クラブ生協、福祉クラブ生協の共同購入カタログ、Instagram、会報誌などで生産者の情報(環境に配慮し、伝統を継承していることなど)、また、クラフト品の購入が生産者の自立支援に役立っていることを伝えました。

クラフトの生産者

●Fair Weave(カンボジア)

カンボジアの伝統染織技術で教育や雇用の格差をなくそうと2013年に設立された団体。教育機会が制限され、就職機会も得られないという地方の貧困女性たちの状況を変えようと、地元の資源を使った伝統染織事業を通して、しっかりと賃金を支払えるような雇用を目指しています。



●シヴィライ村モン族の女性たち(ラオス)

生産者のシヴィライ村の女性たちは、1960~70年代に起こったインドシナでの戦争に巻き込まれラオスから追われ難民となりました。1993年にタイの難民キャンプからラオスに帰還したあと居住地となった村で女性たちは農作業の傍ら刺し続けてきた刺繍でハンディクラフトを作り始めました。この貴重な現金収入は、お米や薬、学校へ通うお金などに使われています。



●ホアイホンセンター(ラオス)

40年前より、ラオスで図書活動を行うNPO法人「ラオスのこども」代表でもあるチャンタソン・インタヴォンさんは、天然染色のラオス伝統染織技術の継承と、女性の地位向上を目的として「ホアイホン職業訓練センター」を設立しました。製品の売り上げは、職人の活動継続・ラオス伝統染織技術継承につながります。



●タイルー族Coi(ラオス)

ラオスの少数民族にはそれぞれの暮らしの中で織り染めの技術とデザインを大切にしています。少数民族(タイルー族)が守ってきた綿花栽培から、糸を作り、染め上げ、一枚の布に織り上げます。新しいデザインを取り入れながら、ラオスの少数民族の伝統文化継承に取り組んでいます。



緊急支援事業

2023年2月6日に発生したトルコ・シリア大地震は、死者50,000人以上、負傷者は107,000人以上という大きな被害をもたらしました。地球の木としても支援する必要があると判断し、その支援金をどこに託すか検討した結果、現地にスタッフがいて、情報収集や必要な物資を調達、配布できる団体として特定非営利活動法人パルシックに決定。2023年5月末まで募金活動を行いました。2022年度は424,000円が集まりました。

政策提言活動

以下の声明や要望に連携、協力しました。

•メコン・ウォッチ【抗議・要請】

「内閣官房内閣審議官のミャンマー訪問に対する抗議と要請」を内閣府に提出(7月)

•メコン・ウォッチ【要請書】

「日本政府の対ミャンマーODAの停止を求めます」を外務省に提出(10月)

•メコン・ウォッチ【共同声明】

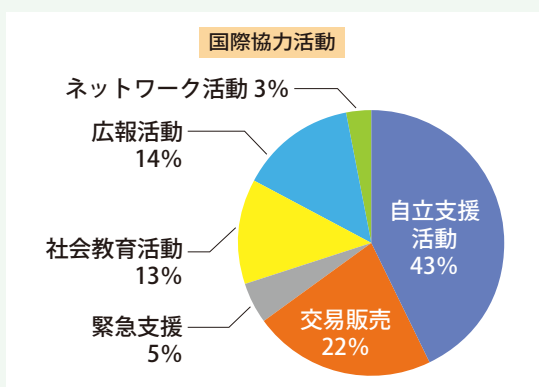
「クーデターから2年 日本政府は対ミャンマー政策の再構築」を内閣府に提出(2月)

•開発教育協会【要請書】

「開発協力大綱の見直しにおける開発教育に関する要望書」を外務省に提出(1月)

2022年度収支報告

総収入	9,139,874円
内 容	金 額
会費	3,129,000円
ご寄付	2,666,272円
物品のご寄付	929,459円
収益事業収入 ※1	2,366,113円
その他 ※2	49,030円
合計	9,139,874円



総支出	12,671,127円
内 容	金 額
国際協力活動	9,314,287円
管理運営	3,356,840円
合計	12,671,127円
国際協力活動	9,314,287円
内 容	金 額
自立支援活動	3,984,559円
取引販売	2,028,636円
緊急支援	424,000円
社会教育活動	1,252,795円
広報活動	1,347,951円
ネットワーク活動	276,346円
合計	9,314,287円

※1 クラフト販売、出前講座、カレンダー販売などの収入です。

※2 会費引落手数料、利息などの収入です。

より詳しい決算資料はホームページで公開しています。

地球の木の活動は会費と寄付によって支えられています。
温かい支援を賜っておりますことに、心より御礼申し上げます。

寄付、遺贈のお願い

寄 付 2,666,272円

個人 308名、 団体 4 団体

————— 寄付の内訳 —————

ネパール 478,001円

ラオス(森と暮らし) 88,840円

ラオス(図書) 43,000円

トルコ・シリア大地震 424,000円

多文化共生 10,000円

指定なし 1,622,431円



■ 寄付について

地球の木は通年ご寄付を募集しております。プログラムを指定してご寄付いただくこともできます。

■ 遺贈について

これまでの人生で築かれた大切なご資産をご寄付いただくことで、あなたの意志を未来へと受け継ぐことができます。

※地球の木は生活クラブ生協運動グループでつくっている「遺贈寄付等相談・市民ネット」に参加しています。ここでは、司法書士や税理士、公認会計士などの専門家にご相談いただくことができます。

寄付、遺贈について、詳しくは地球の木のホームページをご覧ください。

地球の木は認定NPO法人です。

地球の木へのご寄付は寄付金控除の対象となります。

もったいないを掘り起こそう

切手、はがき、貴金属などをご寄付ください！

おうちの中で眠っている書き損じはがき、未使用切手、金券、貴金属などを地球の木にお送りください。国際協力に役立てます。



ギフト券・商品券
図書券・図書カード



QUOカード
未使用テレフォンカード



書き損じ
未使用はがき



未使用切手



金、プラチナ、銀のアクセサリ
など片方だけのもの、
壊れたものでもOKです！



特定非営利活動法人
地球の木

地球の木は1991年に設立され、ラオス・フィリピン・カンボジア・ネパールで社会的に困難な状況にある人々への支援を行ってきた市民活動団体です。国内では、地域や学校での社会教育活動などを行っています。

————— 会員・ボランティアを募集しています —————

地球の木2022年度年次報告書

- 発行 特定非営利活動法人 地球の木
〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内 2F
TEL 045-228-1575 | FAX 045-228-1578
E-Mail chikyunoki@e-tree.jp
ホームページ <http://e-tree.jp/>
- 発行責任者 磯野昌子 ■ 編集 会報作成チーム・事務局
- 発行日 2023年9月25日

